

清涼澄觀の法華經觀

盧 在 性

周知のとおり華嚴宗の第四祖として尊崇される澄觀はその修學期に天台宗の第六祖である湛然より天台止觀と『法華經』及びその注釋書である『疏』を學んだ。又、澄觀の門人である清沔が記した澄觀の十願には「長誦法華經」と、記してあるのを見ると澄觀と『法華經』とは深い因縁があるに違いない。事實澄觀の代表的な著書である『華嚴經疏鈔』には『法華經』より引用した經句が一番多い。しかし、宋代に天台宗の立場から著作された志磐の『佛祖統紀』卷第二十九「賢首宗教の序言」にみえる鎧菴の論評は

華嚴宗の法界觀が別に一縁になるが、賢首の五教には斷伏の分齊がない。然れば、その教理と觀行は、徒に虚文を張るのみで應當に修證の道はない。清涼の頓頓の若きに至つては孟浪に法華より超勝するを言い、圭峯の修門を解釋するは妄りに止觀を談ずるを免れない。餘の著述も矛盾、尤も多い。その根源を別するため賢首宗教志を撰す。(大正藏、49、292下。)

と、述べてあり、その脚注に「清涼が賢首を師宗としながら

『華嚴經疏』の執筆に及んで天台の性善、性惡、三觀、三徳、一念三千の文を引用している。然れば教と觀、進退兩失である」と主張する。やはり宋代の天台宗の人である宗鑑の『釋門正統』卷八は「賢首相涉載記」を収録してその序文にて次の如く叙述している。

荆溪湛然が清涼澄觀の誤つた見解を正す爲に『止觀義例』と『金鉅論』を著作した」と。然れば、澄觀は果たしてどのように『法界經』を見たのであろうか。この問題につきまして先學の研究が多數あるが、小論は、澄觀の『法華經』は『華嚴經』を指して「一切教法の根本である」と述べた」という主張を考察してみたいと思う。

澄觀の『華嚴經疏』は全體の『華嚴經』を解釋するに當つて次の如く十門に分類している。

一教起因縁、二藏教所攝、三義理分齊、四教所被機、五教體淺深、六宗趣通局、七部類品會、八傳譯感通、九總釋經題、十別解文義なり(大正藏35.503. c)。

と。列擧して第一の教起因縁を更に十因と十縁に分類して此の十因の中、第四は、此の『華嚴經』が一切教法の根本になる。(爲教本)と。主張しながら此れを解釋する『華嚴經疏』卷一は

四爲教本者：中略：法華 亦云始見我身 聞我所說 即皆信受
入如來慧 此漸本也 次云除先修習學小乘者 即開漸也 又云我
今亦令得聞是經 入於佛慧 即攝末歸本也 斯則法華 亦指此經
以爲本矣(大正藏35, 304a b)

と。『華嚴經』が一切教法の根本であると主張する爲に『法華經』の從地踊出品の經文を引用しているのである。すなわち、『華嚴經』が一代時教の根本になるの意味に二種あり、一は開漸の根本であり、二は攝末の根本であると説明して後續する文章が上記の『法華經』の經文である。すなわち、「始め我が身を見、我が所說を聞き、即ち、ことごとく信受して如來慧に悟入する」と。述べたのは、「開漸の根本」であり、次の「先に小乗を修習した者を除く」とは、即ち「開漸」であり、次の「我、今、亦、此の經を聞き佛慧に入らしむ」は、「枝末を總攝して根本に歸するなり」と。解説して最後に此れは、『法華經』も『華嚴經』を指して根本である」と。認めたからであると結論づけたのである。此の疏文を解釋する『演義鈔』卷三は「法華亦云」の下は「法華を引用して『華嚴經』が根本法論であることを證明したと言ひ、故に下の

『華嚴經疏』⁽⁴⁾にて、古の吉藏も『法華經』の上記の經文を引用して三種法輪を立て、「第一は根本法輪第二は枝末法輪第三は攝末歸本法輪」と。名づけた。若し、華嚴宗の人が自ずから「根本」であるとするれば、自己中心的であるが爲に、その意味が未明の恐れがあるうが、『法華經』の側からこの『法華經』を指して「根本」とすれば本義がようやく明らかなり。「始め我身を見て佛慧に悟入する」のが既に即ち『華嚴經』であれば、亦、『法華經』を聞き佛慧に入らしむも當然、「初(の『華嚴經』)」を指して根本法論としたのに違ひない。又、『法華經』卷第一(方便品)に云く「一佛乘に分別して三を説く」⁽⁵⁾とは、亦是、根本より枝末を流出するなり。即ち、『華嚴經』を指して一佛乘となし、分別して昔の三を説く。とは、鹿野苑にて聲聞の爲に四諦の法輪を説き、……等なり。若し、『華嚴經』を指して根本にしなければ鹿野苑の以前に何をもつて一乘にしようか。と。確信しているのである。澄觀のこのような確信は、華嚴經疏序」の若乃千門潛注與衆典爲洪源萬德交帰攝群經經眷属(大正藏35, 503, 上)

を解釋する『演義鈔』卷一は、「一佛乘に分別して三を説く」を「一佛乘」とは即ち『華嚴經』なり。」と。主張し、上記の『法華經』卷第一(方便品第二)と同卷五(從地踊出品第十五)の經文を引用してもっと進んで、『法華經』は餘經を攝して『華嚴經』に歸らしむなり。これは法華もまた、華嚴

を指して根本にした」（大正藏367・中）と。主張した。

1 新文豐出版公司印行『正續選輯 史傳部』20910, 下。

2 鎌田茂雄『中國華嚴思想史の研究』（東京大學出版會、1963年
初版1958年復刊）。吉津宣英『華嚴禪の思想史的研究』（大同
出版社、1991年）。吉津宣英『華嚴一乘思想研究』（大同出版
社、1991年）。吉津宣英『華嚴教學と『法華經』』（勝呂信靜博
士古稀記念論文集）、平成8年。吉津宣英『中國華嚴學派の人人
による天台教學の依用——特に天台義への澄觀の依憑に注目して
——』（『天台大師研究』平成九年三月）などがある。特に最後の
論文は、最澄が弘仁四年（813）に撰述した、十一人の中國や新
羅の佛教者たちが、いかに天台を據り所としているかを論じて
いる『大唐新羅諸宗義匠依憑天台集』（『佛教大師全集』第三卷
所収）を検討しておられるが、其中に華嚴宗の智儼、法藏、慧
苑、澄觀の項目を設けておられる。それによると、智儼教學に、
ある程度天台と對蹠的な類同性を推測するような所があり、法
藏の天台教學への賞讃乃至敬遠が有るのに比較して、慧苑の天
台教學への批判、澄觀の天台義への依憑を法藏の五教判に對す
る見方より注目しておられる。

3 大正藏96・中

4 『華嚴經疏』卷一は、第二藏教所攝にて「隋末唐初吉藏法師依
法華第五立三種法論一始見我身聞我所說即皆信受入如來慧即根
本法論二除先修習學小乘者即枝末法論三我今亦令得聞是經入於
佛慧即攝末歸本法論……」

5 大正藏97・中

〈キーワード〉『華嚴經』、『法華經』、清涼澄觀。

（中央僧伽大學教授）

掲載されなかった諸氏の発表題目（1）

有部系『長阿含經』の「戒蘊聚」について

岩松浅夫（創価大学）

「律藏」における出家諸規定の形成過程

森 章司（東洋大学）

法華經の基本構造

刈谷定彦（種智院大学）

化現・化没の考察

龍口明生（龍谷大学）

『顯揚聖教論』について

早島 理（長崎大学）

釈迦牟尼の成道——宗教的史実とその永遠性——

高田順仁（種智院大学）

不生・『般若經』の「大いなる発見」

津田真一（国際仏教学大学院大学）